

特集 私のほんとうの 仕事を考える シンポジウム



1996年6月28日・埼玉大学

大学シンポジウムの取組について

坂林 哲雄（協同総研専務理事）

失業率が3.5%となり、経済的理由を苦にした自殺が急増していることが発表されました。「景気に薄日」などの報道が続いていますが、雇用は依然として厳しい状況です。「資本は生産過程から労働という要素を排除する最後の戦いに入った」というショッキングなレポートも発表されています。一部企業が採用枠を拡大するというニュースがセンセーショナルに伝えられるところに現実の厳しさを感じます。どこかの会社に就職することが「働くこと」であった学生は、こういう現実をどう考えているのか。そしてどう取組もうとしているのか。また、女子学生に対する就職差別も一層激しさを増しています。地域社会や自然環境に対する会社の責任・倫理が問われる一方で、働くことは会社に就職することなのかという問いもまた一人一人の個人に発せられているのではないのでしょうか。

94年2月から95年3月までの全国6ヶ所でシンポジウム「雇用不安と労働の未来」を開催し、雇用不安に対して、働く者が自らの力で労働の未来を創造しようと、様々な分野で新たな仕事おこしを担う人々が交流し、ネットワークをつくってきました。今回の企画はその学生版として行われるものです。就職難の中で本当に自分にやりたい仕事を見つけようとする学生が増えています。失業と就職難をめぐる状況がどのように生まれているのか。この事態を超えて仕事と人生と社会の見通しをどう持つべきなのか。本当に求められている仕事、おこすべき仕事はどのようなものなのか。こうした問題を学生諸君と全大学人の協同で探求したいというのが最初に呼びかけた趣旨でした。

協同組合の価値には「連帯」や「社会的責任」をも含み、その活動は「コミュニティの持続可能な発展のため」にもあるということ、今回のICA原則は明らかにしました。雇用＝働くというテーマについて、協同組合はほとんど無関心であったように思います。人的物的な施設を利用し、財やサービスを提供するのを主要な事業としてきた協同組合にあっては、働くという問題まで及ばなかったというのはある意味では当然だったと思います。しかし、今日の地域をめぐる主要な問題の一つは間違いなく働く場の確保です。働くことを捨象して地域は成り立たないし、協同組合も成り立ちません。協同総合研究所は、仕事づくり地域おこしを焦点に今後も同様の企画を進めて行きたいと思っています。